

前提を持つ副詞「やはり」の統語的特徴

－ 文の段階性との関わりを中心に －

吳 珠 熙*

目 次

1. はじめに
2. 「やはり」に關係する前提について
3. 「前提」の種類による用例の分類
4. 「やはり」の統語的特徴
 - 4.1 文末モダリティ形式との共起關係
 - 4.2 文の階層性との關係（連体節の場合）
5. 「やはり」の各用法の持つ前提と統語的特徴との關係
6. 「やはりⅡ」と命題副詞との相違点について
7. まとめと今後の課題

1. はじめに

「やはり」¹⁾の前提に關する先行研究には、まず、「やはり」の諸用法を包括する前提の概念として、「社會的通念・常識」(金田一(1962)、大關(1993)など)、「話し手の固定觀念」(板坂(1971)、西原(1988)など)などを提示している研究がある²⁾。しかしながら、各先行研究で提示されている前提の概念には、それだけでは説明できない反例が存在する。これは、各先行研究の論点が「やはり」に關係する前提のある一面だけを捉えるに留まっているのと同時に、「やはり」に關係する前提の多様性が反映された結果であると考えられる。一方、森田(1977)、蓮沼(1998)は、「やはり」に關係する前提の多様性に注目し、複数の前提を認め、前提の相違によって「やはり」の用法を分けている。

本考察では、「やはり」に關係する前提について、諸用法を包括できるような抽象的なものとして捉える前者の立場より、その多様性を認め、複数の前提を設定する後者の立場に基づき、考察を行うことにする。なぜなら、諸用法を包括するような概念を規定することも重要ではあるが、あまりにも抽象的な概念の前提を設定してしまうと、前提とかわりを持つ他の副詞との區別が困難になると同時に、「やはり」の持っている前提の特徴が捉えにくくなるからである。

* 東亞大學校 講師 日本語學

1) 「やはり」の口語的な異形態としては、「やっぱり、やっぱし、やっぱ」などがあるが、本考察では「やはり」を代表とする。

2) 「やはり」に關する研究史については、加藤(1999)に詳しい。

しかし、森田(1977)、蓮沼(1998)は、「やはり」に複数の前提を認め、前提の相違によって「やはり」の用法を分類してはいるものの、各用法間の関係についての言及はなく、複数の用法を並列的に扱っている。

そこで、本考察では、前提に基づいて分類した「やはり」の各用法における統語的特徴を明らかにし、異なる前提を持つ用法の間には統語的特徴においても差異が見られるかについて分析する。そして、各用法の持つ前提の特徴と統語的特徴との間にはどのような関係があるかについて述べることにする。

2. 「やはり」に關係する前提について

考察では、先行研究を検討し、「やはり」に關する前提を想定する。先行研究で指摘されている「やはり」の前提は、その内容から「社會的通念・常識」「話者個人の考え」「客觀的事態」の3つにまとめられる。以下では、それぞれの用例を挙げながら、各前提について述べることにする。

まず、「社會的通念・常識」を前提とする用例としては次のようなものが挙げられる。

- (1) 「好きな女性のタイプは？」「やっぱり着物の似合う美人ですね」(金田一(1962))
- (2) 昔は評判の美人だったが、やはり年齢による衰えは隠せない。(蓮沼(1998))

これらの例は、それぞれ「日本の男性は着物の似合う女性が好きだ」(例(1))、「人は年を取ると肉体的に衰える」(例(2))という「社會的通念・常識」を前提にし、「やはり」に後續する当該事態がその前提と合致することを表している。

次に、「話者個人の考え」を前提とする用例には次のようなものがある。

- (3) あんなに運動したけれど、やはり当選は無理だったか。(森田(1977))
- (4) 盛蕎麥ください、いや、やっぱり掛蕎麥にしてください。(深尾(1996))

これらの例は、それぞれ「当選は無理だ」(例(3))、という話者自身が發話以前に持っていた予想や「掛蕎麥にしたい」(例(4))という發話時における話者の願望などを前提にし、「やはり」に後續する当該事態がその前提と合致することを表している。本考察では、これらの例が前提にしている、話者の予想や願望などを「話者個人の考え」と呼ぶことにする。「話者個人の考え」は、個人レベルの情報であることから、前述した「社會的通念・常識」とは異なるものである。しかし、いずれにせよ、「やはり」が適切に使われるためには、その前提内容が先行文脈ないし状況の中で窺えるというような制限が必要であると言えよう³⁾。

3) 森本(1994)は、聞き手が存在する場合、「やはり」が適切に使われるには、話し手と聞き手が共有する知識が前提とされていて、そこから、話し手の期待することが引き出されなければならない」(p.134)と述べている。

最後に、「客觀的事態」を前提とする用例には次のようなものがある。

- (5) 皆と同様、私もやはりストライキには反対だ。(森田(1977))
- (6) 去年も暖冬だったが、今年もやはり暖冬で雪が少ない。(森田(1977))

これらの例は、それぞれ「皆が反対している」という同じ時空間に存在する他の事態(例(5))や「去年は暖冬だった」という時間的に先行する過去の事態(例(6))が前提となっており、「やはり」は、当該事態がその前提と合致することを表している。これらの例が前提にしているものは、共通して話者の主観が關与できない「客觀的事態」であると言える。

3. 「前提」の種類による用例の分類

<表1>は、「やはり」の實例を「やはり」の持つ3種の前提と、「やはり」と共起する文末モダリティ形式との關係を中心に分類した結果である⁴⁾。

「やはり」に關係する3種の前提に基づいた分類は、文末モダリティ形式との共起關係において一定の傾向性を見せている。つまり、「社會的通念・常識」、および、「話者個人の考え」が同様に幅廣い共起關係を見せているのに対し、「客觀的事態」は、斷定文に主に共起し、共起する文末のモダリティ形式の範囲が比較的限られていると言える。

本考察では、共起關係にみられるこのような相違によって、「社會的通念・常識」、「話者個人の考え」と当該事態との合致を表す場合を「やはり」の「用法Ⅰ」、そして、「客觀的事態」と当該事態との合致を表す場合を「やはり」の「用法Ⅱ」と、「やはり」の用法を2つに分けることにする⁵⁾。

- 4) 用例は次のように、文章語が中心である新聞、小説と口語が中心であるシナリオを資料として収集されたものである。
 - I. 朝日新聞：社説 85-86,94-95,00.2-01.9 / 天聲人語 85-87,00.2-01.9 / レイディ通信(對談) 99.10-01.1 / アエラ(おすすめ記事) 98.10-00.7 / ひととき(讀者投稿) 99.2-01.1 / 自分にごほうび隊(趣味) 99.2-00.3 / 地球の暮らし(エッセイ) 98.10-00.05
 - II. シナリオ：『土曜ドラマ館』(ラジオ)：FM福岡土曜日12:30-12:55放送、'97.10-'01.8
 - III. 小説：CD-ROM版 新潮文庫の100冊 1995 新潮社
- 5) 「やはり」は、従来、多様な談話機能を持つものとして注目されてきた。先行研究で提示されている「やはり」の談話機能をまとめると次のようなものがある。

- (Ⅰ) 「世間との調和的態度」(板坂(1971))
- (Ⅱ) 「強引に相手を自分の話に引き込もうとする姿勢」(多湖(1977))
- (Ⅲ) 「妥當な推論の歸結の主張」(西原(1991))
- (Ⅳ) 「獨斷の緩和・判斷の責任回避」(大關(199))

先行研究の中で提示されている「やはり」の談話機能は、本考察の「やはりⅠ」、すなわち、「社會的通念・常識」、「話者個人の考え」を前提にして用いられる「やはり」に認められるものである。つまり、先行研究で提示されている「やはり」の多様な談話機能のうち、(Ⅰ)(Ⅳ)は「社會的通念・常識」を前提としている場合、その以外は「話者個人の考え」を前提としている場合に關係する談話機能であると考えられよう。

このように「社會的通念・常識」と「話者個人の考え」は、談話的機能において異なる特徴を持っていると考えられるが、本考察では、文末モダリティ形式との共起關係という統語的特徴を重視し、兩者を一緒に「やはりⅠ」としてまとめて扱うことにする。

以下では、「やはり」の「用法Ⅰ」を「やはりⅠ」、「やはり」の「用法Ⅱ」を「やはりⅡ」とし、考察を行うことにする。

〈表1〉

共起形式		用法	Ⅰ		Ⅱ	合計	
			社会的 通念・常識	話者個人の 考え	客観的事態		
文* 末 形式	判断系	断定	用言の終止形	131 (56.22)	81(44.02)	84(98.82)	296(59.56)
		概言	ダロウ	21(9.01)	13(7.07)	0	34(6.84)
			カモシレナイ	0	4(2.17)	0	4(0.80)
			ニチガイナイ	1(0.43)	1(0.54)	0	2(0.40)
			ヨウダ	3(1.29)	2(1.09)	0	5(1.01)
			ラシイ	8(3.43)	2(1.09)	0	10(2.01)
			シソウダ	1(0.43)	0	1(1.18)	2(0.40)
		ト思ウ	4(1.72)	0	0	4(0.80)	
		疑問	カ	9(3.86)	7(3.80)	0	16(3.22)
			カナ	2(0.86)	2(1.09)	0	4(0.80)
	ノデハナイ (ダロウ カ)		11(4.72)	3(1.63)	0	14(2.82)	
	説明	ノダ	15(6.44)	22(11.96)	0	37(7.44)	
		モノダ	3(1.29)	0	0	3(0.60)	
		ハズダ	1(0.43)	1(0.54)	0	2(0.40)	
		ワケダ	0	1(0.54)	0	1(0.20)	
	当爲	ナケレバナラナイなど	10(4.29)	6(3.26)	0	16(3.22)	
	自發	ズニハイラレナイ	1(0.43)	4(2.17)	0	5(1.01)	
	待ち 望 み 系	意志	動詞の意志形など	0	10(5.43)	0	10(2.01)
		願望	～タイ～ テホシイ	6(2.58)	7(3.80)	0	13(2.62)
		勧誘	～タホウガイイノデハ ナイデショウカ	3(1.29)	3(1.63)	0	6(1.21)
一語文			0	6(3.26)	0	6(1.21)	
省略・倒置			3(1.29)	4(2.17)	0	7(1.41)	
合計**			233 (46.88)	184 (37.02)	85 (17.10)	497 (100.00)	

* 仁田 (1991) の分類による⁶⁾。

6) 本考察では、仁田(1991)分類に従い、文末モダリティ形式を判断系と待ち望み系に二大別した。そして、概言、疑問、説明などの下位分類については、森田(1989)、益岡・田窪(1989)を参考にした。

** () は縦列の合計を100.00%にした場合の各セルの比率を表し、《 》 は右下の全合計を100.00%にした場合の各前提の合計値の比率を表す。

4. 「やはり」の統語的特徴

4.1 文末モダリティ形式との共起関係

文末モダリティ形式との共起関係から見た場合、「やはり I」は、断定、概言、疑問などの判断系モダリティ形式((7)~(9))から、願望、意志、勧誘などの待ち望み系モダリティ形式(10)~(12))まで、幅広い共起関係を見せている。

- (7) 今は椿油や木炭の生産は激減したが、大島はやはり椿の島だ。(天聲870 204)
- (8) ある都市銀行の社内テレビは「澁谷支店さん」と身内にも敬称を忘れない。地図のなかの企業名にいちいち「さん」を付けたのにも出合った。もちろん、こんな使い方はおかしい。敬称の相手の基本は、やはり生身の人間だろう。(天聲000327)
- (9) 翌朝、母の枕元でもう一度お参りしてから吟子は實家を出た。「やはり歸るの？」奥の間で支度をしていると友子が七つになる男の子を連れてきて言った。(花)
- (10) 親が元氣なうちは、面倒も見てもらえる。だが、いつか別離のときがくる。そうになると、別れ別れにどこかの療護施設に入るしかない。やはり友だちや知人のいる土地で、暮らし続けたい。(天聲861118)
- (11) 電話がなる
 雅子：はい、有川です。ただいま、留守にしております。ご用件は発信音の後にどうぞ。後程、ご連絡いたします。ピー(留守電の発信音と巻き戻し音)
 健二(留守電)：有川先生。山北です。ボク、やはり、行きません。母が、なんといっても気にしないでください。(ルス)
- (12) 信 行「千恵(とまたたしなめる)」
 正夫「(頷き)まず話しあうべきことは、警察に届けるべきか、否か、ということですが……」
 和代「やはり、警察を頼ったほうがいいんじゃないでしょうか」
 千恵「冗談じゃありません！そんなことしたら殺されちゃいますわ、信哉が」
 明子「あたしも反対です、子供の命を第一に考えなければ……」
 信行も頷いている。(うち)

これに對し、「やはり II」は、ほとんどの例で断定文(用例数の98.82%)と共起している。

- (13) 雌のコアラのパープルが死んだ。ストレスが原因だった。續いてやはり雌のユカリが死んだ。(天聲851006)
- (14) 今年もやはり銀座や京橋に燕(つばめ)が戻ってきた。(天聲850515)

ところが、「やはり II」は、例(15)(作例)のように概言などのモダリティ表現とも共起できると考えられる。

(15) 祖父も父も癌で死んだ。私もやはり癌で死ぬだろう。

しかし、「やはりⅠ」と「やはりⅡ」が同じく「～だろう」と共起しているとしても、両者の係り先は異なると考えられる。これは、「やはりⅠ」が「それ」などの文代名詞の指す内容には含まれない(例(16))のに對し、「やはりⅡ」は文代名詞の指す内容に含まれる(例(17))ことからわかる。

(16) A：やはり [選挙運動に参加したほうがいい] んですね。

B：それについては同意見です。

(17) A：[彼女の姉妹はみんな三つ子を産んだけど、先月、彼女もやはり三つ子を産んだ] のよ。

B：それは珍しいですね。

任意の文を代用形で(英語では、it、so、もしくは、関係代名詞whichなどで、日本語では、「そう」「それ」などで)置き換える操作は、文代名詞化と呼ばれる(澤田(1978)、p.23)。このような代用形の指す内容は文の命題内容であるため、文副詞は命題副詞と異なって、文代名詞化のスコープに入らない。

具体的にいえば、例(18)の兩文の「それ」は指す範囲が互いに異なっている。つまり、aの「それ」は「彼がはやく泳げる」という事実を指している。bの「たぶん」は「それ」が指す内容の中に含まれていない(森本(1994) p.185)。

(18) a：「彼ははやく泳げる]よ」「それは知りませんでした」

b：「彼はたぶん[泳げる]でしょう」「それは知りませんでした」

aとbの例は、「たぶん」と「はやく」が文代名詞化によって、各々、命題内と命題外にあるものとして區別されることを示しており、「たぶん」は、文代名詞化のスコープに入らないことから、文副詞と見なすことが可能である。

従って、「たぶん」と同じく文代名詞化のスコープに入らない「やはりⅠ」は、命題内容には含まれないものと言える。そして、文代名詞化のスコープに入る「やはりⅡ」は、命題内容に含まれるものと解釋すべきであろう。

しかしながら、文代名詞が指示する内容については個人による解釋の差がみられる可能性が少なくない。従って、兩用法の差異を明らかにするのに、文代名詞化にみられる「やはりⅠ」と「やはりⅡ」の特徴を指摘するだけでは不十分であると考えられる。

以下では、連体節を中心に文の階層性における「やはりⅠ」と「やはりⅡ」の位置づけを考察して、文代名詞化における両者の差異をより明らかにしたい。

4.2 文の階層性との関係(連体節の場合)

從屬節における「やはり」の位置づけは、南(1974,1993)⁷⁾のモデルによれば、B類の要素とされてい

7) 南(1974,1993)では、從屬節を從屬節の主節に對する依存度の高低の観点から分けている。具体的には、接續節の複文を主に從屬節の内部に収まる文法的カテゴリーの種類とその量を調べること

る。以下、実例を検討しながら文代名詞化における「やはりⅠ」と「やはりⅡ」の差異が従属節、特に連体節内においても存在するか、つまり、文の階層性における「やはりⅠ」と「やはりⅡ」それぞれの位置づけに反映されているか、どうかについて考えてみる。

「やはりⅠ」の場合、連体節内に共起した実例が採集できなかったのに對し、「やはりⅡ」は連体節内に共起した例が48例あった。

南(1974,1993)⁸⁾では、「やはり」はB類の連体節内に入るとし、次のような例を挙げている。

(19) やはり歸ってきたF君(p.131)

例(19)の「やはり」は、「期待通りにF君は歸ってきた」という「やはりⅠ」の解釋と、「F君も歸ってきた」という「やはりⅡ」の解釋が兩方とも可能である。すなわち、「やはりⅠ」と「やはりⅡ」は同じく、南(1974,1993)のB類の連体節に入るものと言える。

しかし、本考察で行った調査で連体節における「やはりⅠ」の用例が一例も収集できなかったという事実は、連体節において「やはりⅠ」と「やはりⅡ」との間には何らかの違いがあることを示唆しているものと考えられる。

そこで、本考察では、連体節をその機能から限定的連体節と非限定的連体節とに區別している研究を参考にし、連体節における「やはりⅠ」と「やはりⅡ」の違いについて述べることにする⁹⁾。

益岡(1995)は、連体節の表現には、限定的なものとは非限定的なものが區別できるとし、このうち、非限定的連体節は主名詞が連体節に對して主題の性格を持ち得るが、限定的連体節はこのような性格を持っていないと述べている。そして、主題は、南(1974,1993)によれば、C類に屬する要素であることから、主名詞が主題的性格を持つ非限定的連体節には、南のいうC類の要素が現れ得るが、限定的連体節の主名詞は主題性を持っていないので、C類の要素が現れ得ないとしている(p.147)。

によって従属節の主節に對する依存度を測定しているのである。

南(1974,1993)は、連用節を次のように分けている。

- A 類：ナガラ1(繼續)、ツツ、連用形反復、テ1(付帶狀況)、連用形1(付帶狀況)
- B 類：ト/バ(恒常條件)、ナイデ、ズ(ズニ)、テ2(繼起)、ナガラ2(逆接)、タラ/ト(時)、バ/タラ/ナラ(仮定條件)、テモ、テ3(理由)、連用形2(理由)、バ/タラ/ト(慣用表現)、ノデ、ノニ
- C 類：ガ/ケレドモ(逆接・前置き)、テ4(並列)、シ(理由取り立て)、カラ

8) 南(1974, 1993)は、名詞句(連体節)について次の四つの段階を認めている。(pp.139-153)

- A 段階：「住宅ノ申シ込ミ」「赤イ帽子」「冷害地帯ノ救済策」など。
- B 段階：一般に名詞になんらかの連体修飾語がついたもの。「キノウ靴買ッタ次郎」「ドンナニ注意シテモイウコトヲキカナイ子ドモ」など。
- C 段階：提示のことばの類。「西ドイツ M市、ココへ我が社ノ若イ工員ガ毎年十名ズツ派遣サレテイマス」「七時ノニュース(ニュースの最初にいうことば)」など。
- D 段階：呼びかけのことば、相手に對する注意の喚起や命令・要求の意味を持ったもの。「伊藤サン!」「ホラ、水タマリ!」「コッチ、コッチ!(コッチヘコイ)」など。

A, B兩段階の名詞句は連体修飾語またはその一部になることが出来るものであったが、C, Dのものは連体修飾語またはその一部になることが出来ない。常識的な意味での名詞句およびその構造が問題となるのはA,Bまでである。

9) 金水(1986)、田窪(1987)、益岡(1995、2000)など。

その根據として、C類の要素である、「だろう」「どうやら」のようないわゆる「推量」を表す要素を取り上げ、限定的連体節と非限定的連体節との違いを示している。

まず、限定的連体節の場合、例(20)(21)のように、「だろう」「ようだ」のようなC類の要素が現れにくいのに對して、非限定的連体節のほうは、例(22)、(23)で示されるように、「だろう」「どうやら」のような要素が無理なく現れる(p.148)。

- (20) ? 今度の選挙で落選するだろう候補は公認の対象から外された。
 (21) ? どうやら何か事情を知っているような男のほうに質問してみた。
 (22) 今度の選挙で落選するだろう A候補は公認の対象から外された。
 (23) どうやら何か事情を知っているようなその男のほうに質問してみた。

益岡(1995)は、以上の觀察から、非限定的連体節は、限定的連体節とは異なり、C類の表現であると結論づけている。

さらに、益岡(2000)では、次のように、モダリティ要素である評価の副詞(例えば、「幸い」、「あいにく」)や推量の表現(例えば、「だろう」、「ようだ」)が限定的連体節に生起できないことから、限定的連体節は命題レベルのものとされている(p.5)。

- (24) ? 幸い難關の試験に合格するだろう受験生 (がこのクラスには大勢いる)

これに對して、非限定的連体節の表現には、評価の副詞や推量のようなモダリティ要素が生起できる。それゆえ、非限定的連体節はモダリティレベルの表現であると述べている。

- (25) 幸い難關の試験に合格するだろう田中君 (をどのように祝ったらよいのだろう)

以下では、限定的連体節と非限定的連体節において、「やはり I」と「やはり II」はそれぞれどのような特徴を示すのかについて検討する。

まず、「やはり I」は、「幸い」「だろう」のようなC類のモダリティ要素と同じく、非限定的連体節には生起できるが、限定的連体節には生起できないといえる。

- (26) ? 難關の試験にやはり合格した受験生 (がこのクラスには大勢いる)
 (27) 難關の試験にやはり合格した田中君 (をどのように祝ったらよいのだろうか)

なお、本考察では、追加調査を行い¹⁰⁾、「やはり I」が連体節に現れる實例を1例収集することができたが、次のように、實例においても「やはり I」が生起しているのは非限定的連体節であると言える¹¹⁾。

- (28) なんだかんだいっても、やはり畫一性を大事にしてしまう學校教育)を、いまこそ見直してみるべ

10) 2003年 1月頃に實施。約350例を検討した。(Digital News Archive、2002年 6月 ~2003年 1月)

11) 例(28)の「やはり畫一性を大事にしてしまう」という連体節は「學校教育」という主名詞を限定していない。「やはり畫一性を大事にしてしまう」の有無にかかわらず、「學校教育」という名詞の指示對象は一定している。

きではないか。みんな一緒、横並びの集団行動がいいと先生や親が考えていては、自立心も冒険心も生まれにくい。違いを違いとして互いに尊びあう社会をめざす教育こそが日本の力となる。(030112、朝日)

前述したように南(1974, 1993)では、「やはりⅠ」と「やはりⅡ」を両方ともB類の連体節に含まれる要素とされている。これは、南のいうB類の連体節は、限定的連体節と非限定的連体節との区別が成されていないからであると考えられる¹²⁾。しかしながら、非限定連体節は、「だろう」のようなC類のモダリティ要素が含まれ得るなどの統語的特徴から、C類のものとして修正されるべきであると考えられる¹³⁾。そして、非限定的連体節だけに生起する「やはりⅠ」も、C類のものとしてすべきであろう。

これに對し、連体節に現れる「やはりⅡ」の用例には、次のように限定的連体節(例(29))と非限定的連体節(例(30))の両方が見られる。ここから、「やはりⅡ」は、非限定的連体節はもちろん、限定的連体節にも現れ得るものと言える。

(29) 今年の五月他界した私の姉もがんだった。常識ある義兄が、わらをもつかむ思いだったのか、末期がん患者にも効くという信州にわく命の水を姉に飲ませたいと連れて行く車中で、彼女は息絶えた。三年前、妻をやはりがんでなくした友がいる。彼女とは高校卒業と同時に結婚し、どこに行くにも一緒だったという。妻を失った後何度も後を追いたいと思ったが、残される子らを考え踏みとどまったそうだ。(ひと990928)

(30) 世界最大のパソコンメーカーのコンパック。九七~九八年に、やはり世界的な大手メーカーだったDECとタンドムを合併し、従業員数は二倍以上に急増している。

(アエ000110)

さて、益岡(2000)では、限定的連体節は命題レベルのものであるとされている。そして、このような益岡(2000)の指摘に基づけば、限定的連体節に現れ得る「やはりⅡ」は命題要素であると言えることになる。

ここまでの考察は、<表2>のようにまとめられる¹⁴⁾。

<表2>

12) 南(1974,1993)で、B類の連体節に「やはり」が生起している用例として挙げられている例(19)は、非限定連体節であると言える。
 13) 非限定的連体節をC類の要素としている先行研究としては、他に田窪(1987)がある。田窪(1987)は、南(1974)で提案されている文の階層構造について、疑問などの焦点が置かれるのはA、Bの段階にある要素のみであり、Cの段階の要素には焦点が置かれないと述べている。そして、非限定的連体節には疑問の焦点である不定詞が含まれないことからC類の要素であるとしている。
 (i) あなたは誰が書いた本を読みましたか。
 (ii) *あなたは誰が書いたその本を読みましたか。
 14) 連用修飾節における「やはりⅠ」と「やはりⅡ」の分析については吳(2001)を参照されたい。

	やはり I (類義表現：思った通りに、 なるほど)	やはり II (類義表現：また、同様に)
共起する文末形式の範囲	すべての文末モダリティ形式 と共起可能(但し、意味的に呼 応しているわけではない)	断定形に限定される(但し、モ ダリティ形式とも共起可能)
文代名詞化のスコープ に入る	x	o
連用修飾節	加藤(1995)のⅢ類(南 (1974,1993)のC類に該当)	加藤(1995)のⅡ類(南(1974,1993) のB類に該当)
連体修飾節	非限定的連体節(南 (1974,1993)のC類に該当)	限定的・非限定的連体節の両方(南 (1974,1993)のB類に該当)

5. 各用法の持つ前提と統語的特徴との関係

前節の〈表 2〉から、「社会的通念・常識」「話者個人の考え」を前提にしている「やはり I」は、南(1974,1993)のC類に属するものであり、モダリティ副詞としての統語的特徴を持っていると言える¹⁵⁾。これに對して、「客觀的事態」を前提にしている「やはり II」は、B類に属するものであり、「やはり I」に比べ、命題要素に近い統語的特徴を持っている。兩者にみられる、このような統語的な差異は、各用法の持つ前提の内容とその現れ方に起因するものと考えられる。

まず、「やはり I」の前提、すなわち、「社会的通念・常識」「話者個人の考え」とは、話者によって、その内容の捉え方が異なるものであり、現れ方においても明示されない場合が多く、話者の心の中に想定されるだけでもよいものである。このような特徴を持つ前提と当該事態が合致することを表す「やはり I」の判断には、話者の主觀が大いに關与していると考えられよう。それゆえ、「やはり I」はモダリティ副詞としての統語的特徴を示すのであると考えられる。

これに對して、「やはり II」の前提である「客觀的事態」は、その内容の解釋において話者の主觀の入る余地のない客觀的事實であり、必ず先行文脈に明示されるものである。このように明示的で客觀的内容の前提と当該事態が合致することを表す「やはり II」の判断には、話者の主觀が關与しにくいものと考えられよう。それゆえ、「やはり II」は、「やはり I」に比べ、統語的に命題要素に近い特徴を見せしていると解釋できる。

6. 「やはり II」と命題副詞との相違点について

上記の考察結果から「やはり II」は、モダリティ副詞である「やはり I」とは異なって、文代名詞のスコープに入るなど、命題副詞に近い特徴を見せた。以下では、「やはり II」について、命題副詞との相

15) 「やはり I」が限定的連体節には現れ得ないことや主節から獨立度が高い(從屬度が低い)從屬節(加藤(1995)のⅢ類)に現れるという共起制限は、一般的に「タブン、マサカ」などの陳述副詞類や「ダロウ」などの助動詞のようなモダリティ成分が限定的連体節に現れ得ず、獨立度が高い(從屬度が低い)從屬節に現れるということと一致する。

違点とその機能を中心に述べることにする。

一般的に、命題副詞は命題内容を指すと言われる否定のスコープに入り、そのフォーカス(焦点)にもなれる(例(31))。これに對して、「やはりⅡ」は否定のスコープに入らないことから、命題副詞とは異なる特徴を見せる(例(32))。なお、これはモダリティ副詞である「やはりⅠ」と共通する特徴である。

(31) 太郎はタバコをゆっくり吸わない。次郎もやはり [タバコをゆっくり吸わない]。

(32) やはり太郎は [タバコを吸わない]。

ところが、このような「やはりⅡ」の特徴は、文代名詞に含まれるという、4.1節の考察結果とは相反するものと言える。しかし、これは次のように説明できる。

先行研究では、否定と文代名詞化のスコープの範囲は同じく命題内容であるとされているが¹⁶⁾、兩者のスコープの範囲は、次のように異なる。まず、例(33) Aの否定のスコープは、当該文の命題内容しか指示することができない。これに對して、例(33) Bの文代名詞「それ」は、当該文の命題内容だけでなく、先行文の命題内容までを合わせたものを指示していると解釋できる。つまり、文代名詞化のスコープの範囲は、否定のスコープより広いものと言える。

(33) A: 太郎はタバコを吸わない。弟の次郎もやはり(タバコを吸わない)。

B: それ(下線部分)はいいことですね。

また、「やはりⅡ」は、助詞「も」と共起し、当該命題が前提命題と同類のものであることを表すものである。換言すれば、「やはりⅡ」は、前提命題と当該命題という二つ命題間の関係を表すものとも言える。それゆえ、「やはりⅡ」は、当該命題だけが入れられる、否定のスコープには含まれないが、複合的な命題内容まで指すことができる文代名詞化のスコープには含まれることになると思われる。

以上から、当該文の命題内容に含まれる命題副詞とは異なって、「やはりⅡ」は前提命題と当該命題を結びつける機能を持っており、複合的な命題内容を構成するものと考えられる。

7. まとめと今後の課題

「やはり」は、ある前提を示唆しながら、「やはり」に後續する当該事態がその前提と合致することを表すものと考えられる。そして、「やはり」の示唆する前提としては、「社會的通念・常識」「話者個人の考え」「客觀的事態」の3種の前提が想定できる。

本考察では、前提に基づいて分類した「やはり」の各用法における統語的特徴を文の段階性との関わりを中心に分析し、異なる前提を持つ用法の間には統語的特徴においても差異があることを明らかにした。その結果、森田(1977)、蓮沼(1998)では、並列的に扱われてきた「やはり」の複数の用法は、前提と統語的特徴により、大きく2つに分けられることが分かった。

各用法における前提と統語的特徴をまとめると次の<表3>のようになる。

16) 沢田(1978)、中右(1980)、森本(1994)など。

〈表 3〉

	前提の特徴			統語的特徴： 文の段階性との関係 (南(1974, 1993))
	内容	前提内容の解釋における話者の主観の關与	在り方	
やはりⅠ	「社會的通念・常識」 「話者個人の考え」	可	暗示	C類の要素 (モダリティ要素)
やはりⅡ	「客觀的事態」	不可	明示	B類の要素

本考察は、「やはり」の統語的特徴を「やはり」に關係する前提との關わりを中心に分析を行ったものである。しかし、「やはり」に關係する3種類の前提、すなわち、「社會的通念・常識」「話者個人の考え」「客觀的事態」は、その内容から分けられたものであり、實際、「やはり」の實例を前提によって分類するとき、「社會的通念・常識」であるか、「話者個人の考え」であるか、を判断することが容易では無かった。今回の考察では、「やはり」の後に「皆が思っているように」という語を入れてみて、適切であれば「社會的通念・常識」と捉え、不適切であれば「話者個人の考え」と捉えることにして兩者を區別したが、より明確な記述を行うためには客觀的な分類基準の設定が必要であろう。

【参考文献】

- ・板坂 元(1971) 『日本人の論理構造』講談社新書
- ・吳珠熙(2001) 「「やはり」に關する一考察-「前提」と文末モダリティ形式との共起關係を中心に-」
『日本學報』49 韓國日本學會 pp.181-196

- ・ 大關眞理(1993) 「日本語教育の視点からみた副詞」『早稲田大學大學院教育學研究科紀要』別冊 創刊号 早稲田大學大學院教育學研究科 pp.1-14
- ・ 加藤薫(1999) 「「やはり」論の問題点—その對立する論点の整理と展望—」『日本語研究と日本語教育』森田良行教授古稀記念論文集刊行會 pp.165-183
- ・ 加藤陽子(1995a) 「複文の從屬度に關する考察—主節のモダリティを中心として—」
Working Papers Vol.6 International University of Japan pp.21-37
- ・ 金水敏(1986) 「連体修飾成分の機能」『松村明教授古希記念國語研究論集』明治書院 pp.602-624
- ・ 金田一春彦(1962) 『日本語の生理と心理』至文堂
- ・ 澤田治美(1978) 「日英語副詞類の對照研究：speechact理論の観点から」
『言語研究』74号 日本言語學會三省堂 pp.1-36
- ・ 田窪行則(1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語學』6-5 明治書院 pp.37-48
- ・ 多湖 輝(1977) 『深層心理術』ごま書房
- ・ 中右實(1980) 「文副詞の比較」國廣哲弥(編)『日英語比較講座第2 卷文法』大修館書店 pp.159-219
- ・ 西原鈴子(1991) 「副詞の意味機能」『日本語教師指導參考書』19
- ・ 仁田義雄(1991) 『日本語のモダリティと人称』くろしお出版
- ・ 蓮沼昭子(1998) 「副詞「やはり・やっぱり」をめぐって」吉田金彦編
『ことばから人間を』昭和堂 pp.133-148
- ・ 深尾まどか(1996) 「「やはり」「やっぱり」について」
『名古屋學院大學日本語學・日本語教育論集』第3号 pp.41-54
- ・ 益岡隆志(1995) 「連体節の表現と主名詞の主題性」益岡隆志、野田尚史、沼田善子編
『日本語の主題と取り立て』くろしお出版 pp.139-153
- ・ _____(2000) 「第1章 表現の主観性」『日本語文法の諸相』くろしお出版 pp.1-10
- ・ 益岡隆志・田窪行則(1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- ・ 南不二男(1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- ・ _____(1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- ・ 森田良行(1977) 『基礎日本語 I —意味と使い方—』角川書店
- ・ 森田良行・松木正恵(1989) 『NAFL選書5日本語表現文型—用例中心・複合辭の意味と用法—』アルク
- ・ 森本順子(1994) 『日本語研究叢書7 話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版

要 旨

本論文は、現代日本語のモダリティ副詞「やはり」の統語的特徴を前提と文の階層性との關係を中心に考察したものである。

「やはり」は、ある前提を示唆しながら、「やはり」に後續する当該事態がその前提と合致することを表すものと考えられる。そして、「やはり」の示唆する前提としては、「社會的通念・常識」「話者個人の考え」「客觀的事態」の3種の前提が想定できる。

本論文では、文末モダリティ形式との共起關係にみられる相違によって、「社會的通念・常識」、「話者個人の考え」と当該事態との合致を表す場合を「やはり」の「用法 I」、そして、「客觀的事態」と当該事態との合致

を表す場合を「やはり」の「用法Ⅱ」と、「やはり」の用法を2 つに分けて、文の階層性との関係を中心に各用法の統語的特徴について考察を行った。

その結果、社會的通念・常識「話者個人の考え」を前提にしている「用法Ⅰ」は、南(1974, 1993)のC類に屬するものであり、モダリティ副詞としての統語的特徴を持っているのに對して、「客觀的事態」を前提にしている「用法Ⅱ」は、B類に屬するものであり、「用法Ⅰ」に比べ、命題要素に近い統語的特徴を持っていることが分かった。兩者にみられる、このような統語的な差異は、各用法の持つ前提の内容とその現れ方に起因するものと解釋できる。

キーワード：前提的知識、共起關係、文代名詞、文の段階性、限定・非限定

투 고 : 2004. 5. 31
1차 심사: 2004. 6. 12
2차 심사: 2004. 7. 3

住 所 : (609-761) 부산시 금정구 구서2동 선경3차아파트 302동 103호
電 話 : 011-9510-8845
E-mail : ohjuhui@hotmail.com